震災復興の社会システム学

慶應義塾大学大学院　政策・メディア研究科

国友　美千留
井庭　崇

2006.10.15
社会・経済システム学会

★ 目次 ★

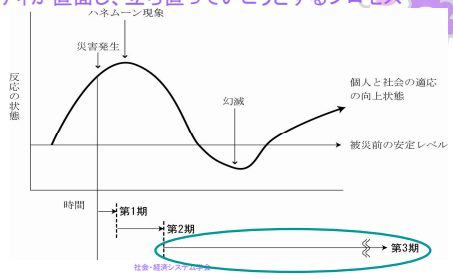
報告概要
理論紹介
事例
総括

報告概要

- 1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の被災中心地、神戸市中央区において発生する事象を事例に。
- フィールド調査、定性調査によって得たデータを、ニクラス・ルーマンの社会システム理論に照らし、理論的整理を行った。
- 機能分化した近代社会における問題として震災復興を捉えた。
- 「震災復興」の持つ2つの社会的機能を明らかにし、新たな捉え方を提示する。

震災復興過程とは

- 災害の発生によって噴出する様々な問題に、被災した個人/コミュニティが直面し、立ち直っていこうとするプロセス



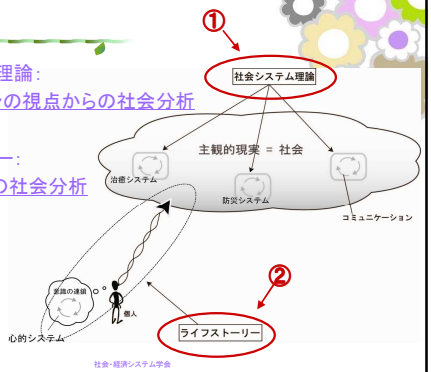
問題意識

- 震災復興過程では、政治、経済、法、心理などについての問題が個別に語られるため、問題と問題との連関が見えてこない。
- 現状れで

災害復興とはなにか、災害復興の機能は
どのようなものかという包括的に「震災」を捉える
視点が欠如している

研究手法

- ①社会システム理論：
  コミュニケーションの視点からの社会分析
- ②ライフストーリー：
  個人の意識からの社会分析



★ 目次 ★

- 報告概要
- 理論紹介
- 具体事例
- 総括

社会システム理論

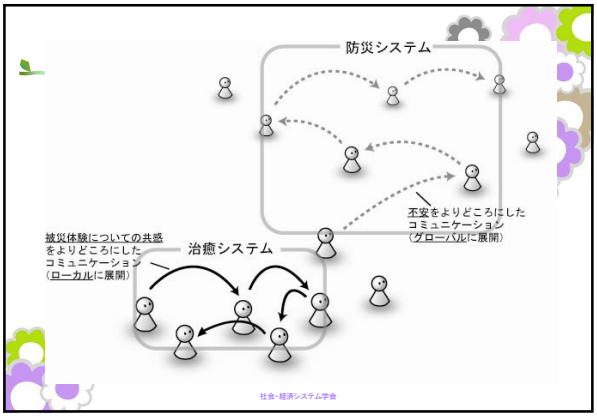
- 社会＝瞬時に立ち消えてしまう「コミュニケーション」で構成される総体　⇒社会システム
  - 社会の要素：コミュニケーション
- 人間、個々人の意識を心的システムとし、社会システムと区別する
- 「コミュニケーション」は、シンボルによって一般化されたコミュニケーション・メディアによって補強される

震災復興の社会的機能

- 震災復興の社会的機能は2つ
  - 防災、治癒
- 震災復興の機能分化したシステムとして、「防災システム」、「治癒システム」を提案する
  - 2つのシステムの決定的な違いは、被災体験を通有しているか否か。

防災システムVS治癒システム

- 防災システム：被災体験を共有しない/顔の見えないシステム
  - コミュニケーション・メディアは「不安」
- 治癒システム：被災体験を共有している/顔の見えるシステム
  - コミュニケーション・メディアは被災体験をめぐる「共感」



★ 目次 ★

- 報告概要
- 理論紹介
- 具体事例
- 総括

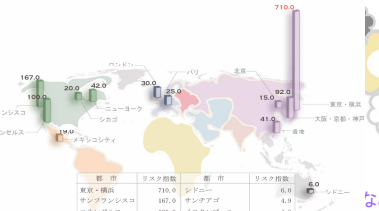
防災システム

- 「不安」を拠りどころにしたシステム
  - 震災の惨状などの情報がマスメディアなどによって媒介され、伝わることで、不安を喚起する。
  - 不安感が新しくて壊れやすい紐帯と連帯とを生み出す(Beck,2002)
  - 防災システムのコミュニケーションは伝わりやすく、誰であっても参加できる

⇒この防災システムの拡張によって、阪神・淡路大震災の機能は「教訓としての防災」へと転じている。

防災

- 「不安
  - ミュ
    アニ
- 防災
  - 防
- 企業
  - 防
- 政策
  - 防



都 市	リスク指数	都 市	リスク指数
東京・横浜	710.0	シドニー	6.0
サンフランシスコ	167.0	サンチアゴ	4.9
ロサンゼルス	100.0	イスタンブール	4.8
大阪・京都・神戸	92.0	ブエノスアイレス	4.2
ニューヨーク	42.0	ヨハネスブルグ	3.9
香港	41.0	ジャカルタ	3.6
ロンドン	30.0	ビンザザール	3.5
パリ	25.0	サンパウロ	2.4
メキシコシティ	19.0	リオ・デジャネイロ	1.8
北京	15.0	カイロ	1.8
ソウル	15.0	デリー	1.5
モスクワ	11.0		

など

治癒システム

- 被災体験をめぐる「共感」を拠りどころにしたシステム
  - 震災についての実体験を持つ人々のうちでローカルに成立する。
  - 震災で負った喪失体験に意味づけをし、被災によって芽生えた新たな価値観や取り組みを通じて被災によって受けた傷を癒していく。

⇒「神戸」という土地にいさえすれば、システムのコミュニケーションに誰でも参加できるかというとそうではない。

治癒システム:*具体事例*

- 被災体験への「共感」を拠りどころにしたコミュニケーション事例
  - 1.17希望の灯り
  - 1.17希望のつどい
  - 震災モニュメント
- 震災遺族の主観的リアリティ分析:ライフストーリー・インタビューより抜粋
  - 一部の「震災遺族」の語りを通した主観的な分析。
    →そのため、分析結果そのものは具体的かつ限定的だが、目的は特定の個人について理解することではなく、個人の主観をとおして社会的リアリティの断片を描き出すことにある。
- 現代社会において被災体験者である(ありつづける)とはいかなることであるのか？

1.17希望の灯り

一・一七 希望の灯り

震災が奪ったもの
命 仕事 団欒 街並み 思い出

たった一秒先が予知できない
人間の限界

震災が残してくれたもの
やさしさ 思いやり 絆 仲間

この灯りは 奉われた
すべてのいのちといきのこった
私たちの思いを
結びつなぐ

- 「灯」にまつわるコミュニケーション
  - 『電気もない真っ暗闇のなかで、灯りをたよりにみんなで身を寄せ合ってた』
  - 『どういうわけか、けっこうみんな灯に想いがあるねん』
  - 1.17に、この灯りを分灯を希望する地域が毎年増えている。シアトル、オーストラリアのほか日本全国96箇所で分灯が行われている。

1.17希望のつどい

- **追悼イベントをめぐるコミュニケーション**
  - 毎年1 月17 日早朝午前5時から同日夜9時にかけて行われている追悼イベント。
  - このイベントに参加することによって、人々は震災が起きたまさにその時点へと帰ってくることができる。
  - 『新年を迎えるみたいな感覚になる』『帰ってくるべき場所』(1.17参加者インタビューより)

震災モニュメント

- 震災モニュメント：震災の犠牲になった人たちへの慰霊の意をこめて建立される慰霊碑
  - 「あの日あのとき」と「今」とをつなぐメディア
  - あとに残された人々が悲しみや苦しみを乗り越える、記憶を語り継いでいくためにこそ必要とされる

★ 目次 ★

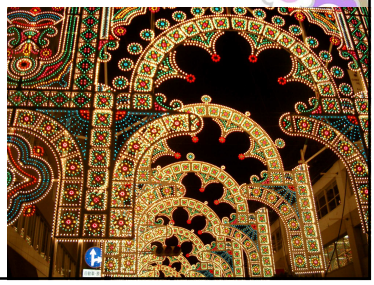
報告概要
理論紹介
具体事例
総括

総括

- 震災復興の社会的機能を、「治癒」と「防災」とし、包括的に「震災復興」を捉える視点を提示した。
- 治癒システムは閉じたシステムであり、体験した人が存在しなくなってしまえば終わる。いかにシステムを開いていくかがポイントになる。
- 治癒システムを開くためのメディア・デザインの必要性

神戸ルミナリエ

- 純粋に「美しい」と感じることから「共感可能性」をはぐくむ



今後の展望：共感システムへ

- 被災経験に基づく「共感」だけではなく、共感の幅を広げる。
  - 「共感」とは、

⇒「ヒロシマ」「ナガサキ」のように、経験の有無にアイデンティティを固定化させてしまうのではなく、「共感」を抱いた人が語り部になってゆく

共感について

- 「偶然性の債務」を人々に通識させること。
  - コンティンジェントであることが人々を苦しめる
- もしかしたら自分もそうなるかもしれない、という認識を持つこと、リスクに対して敏感になること

ご清聴ありがとうございました
慶應義塾大学大学院　政策・メディア研究科
国友　美千留
井庭　崇
2006.10.15
社会・経済システム学会